

第5回「開く」 アフリカの人びとによる発展の試み



エチオピアの農村におけるHIV/AIDS問題への取り組み

効果的なHIV治療の普及により、HIV/AIDSはもはや不治の病ではなくなりました。エチオピアでも2005年からHIV治療薬が無償で提供されるようになり、多くの陽性者が治療を受けながら暮らしています。しかし、エチオピアの農村でHIV陽性者とその家族が生活してゆくには、たんに治療を受けるだけではなく、地域住民による協力がさまざまな局面で必要です。とくに農作業に必要な労働力をどのように確保するかは、切実な問題になっています。この講座では、エチオピア独特のバショウ科作物エンセーテを栽培するグラゲの人びとの暮らしを例にとって、地域の農業共同労働組織が、HIVの影響を受けた家族の生活にどのような役割をはたしているのかを考えてみることにします。

(講師 西真如 京都大学東南アジア研究所 特定助教)

グローバリゼーションの中におけるガーナ都市部の零細企業の取り組み

経済や文化のグローバリゼーションが急速に進行するアフリカで、人びとはその流れにどのように対応しているのでしょうか。ガーナの都市部では1980年代、ストレート・パーマをはじめとする新しいヘアケア技術が欧米から導入され、女性の髪のを装いを一変させました。新しい髪型を求める女性とそれを提供する美容師のいずれもが、ヘアケア製品を売る海外企業の戦略に完全に取り込まれてしまっているように見えます。しかし、本当にそうなのでしょうか。この講座では、外来のヘアケア技術を駆使しながら営業するガーナ美容師を例にとって、彼女らが、グローバルな企業戦略に絡めとられながらも、一方でそれを自らの文脈に取り込んでいく生き方について考えてみます。

(講師 織田雪世 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 博士課程)



タンザニアにおける農村開発の展開と人びとの取り組み

1990年代、国際的な開発戦略の中心テーマが「貧困削減」に移行するのにもなって、農村にどのような「開発サービス」を提供するかが重視されるようになりました。開発の受け手の側からみれば、たくさんの人びとが「住民参加」や「社会開発」などさまざまな開発援助サービスの経験を重ねています。この講座では、タンザニアの農村に暮らす人びとが、さまざまな「開発」をとおして得た経験を生かして、自発的に水道事業に着手した例をとりあげます。経済体制の変化や開発援助の内容の変化に対応して、人びとがどのように新しい生活をつくりあげていこうとしているかを紹介しながら、私たち自身が開発援助の取り組みをどのように評価すればよいのかについても考えてみます。

(講師 黒崎龍悟 京都大学アフリカ地域研究資料センター 研究員)